

総研大の現場から

流行語にもなった「歴女」とおぼしき若い女性たちと遭遇する機会が増えた。著名な城郭や合戦場だけでなく、研究者しか足を踏み入れない山城にも訪れていると聞く。

若い人たちが歴史に興味を抱いてくれることは大歓迎である。ただし、気になることがないわけではない。

サッカーや野球の国際大会に日本代表チームが出場するたびに、「サムライ：」の大合唱。「歴女」たちの関心の的も、戦国武将に偏っている。「世界SAMURAIサミット」開催決定の報道にも接した。現代の日本



総合研究大学院大学
日本歴史研究専攻准教授
高橋 一樹

武士の存在自体を問う

中世と近世をつなぐ資料で検証

おりとはかぎらない覇権争いができるそうだが、誰であれ最後に天下を取るのには武士だという。一向一揆が最終的に勝つことはない。バーチャル世界の話であるがゆえに、「武士中心史観」から自由ではない歴史意識が余計に透けてみえる。私たちになじみ深い武士像が、じつは近代以降

たかはし・かずき 1967年新潟市生まれ。国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学准教授、博士(文学)。歴史学(日本中世史)専攻。武家文書の研究に取り組み。著書に『中世荘園制と鎌倉幕府』(塙書房)、『武士と騎士』(共著、思文閣出版)などがある。

士とはなにか」は、そうした学界の動向と現代社会とのギャップを意識しつつ、モノ資料を使って武士を長いスパンで相対的にとらえてみよう、というのが趣旨である。そこでは、現代人の歴史認識にも影響をおよぼす、武士イメージの作為性や増幅の過程も粗上に載せられる。

中世と近世を連続した目でみると、武士という存在をめぐる連続面と断絶面の絡み合いがほぐれてくる。ここでは一見とつきにくい武士の文書について紹介しよう。

中世社会では合戦の手柄を証明するために、文書のやりとりが行われた。武士は戦功を書き連ねて申告する必要がある、大将から感状というお褒めの文書をもらう。律令制度をたてまえとする日本中世らしい現象で、当時の武士にとって文書作成が家の存続を左右する実用知だった。

ところが、近世の大半は合戦のない時代である。島原の乱を最後に、約2世紀を経た幕末の内戦まで、戦功認定の文書は姿を消す。この空白期をつないだ糸のひとつが、兵学者や軍学者という江戸の軍事アナリストだった。彼らは合戦に使う各種文書のひな型とマニュアルを伝えている。

武士が役人化した「平和」な時代ゆえに、戦闘の作法は、学問として引き継がれた。虚実入り交じったイメージをまといつつ、それが19世紀後半の「再軍備」で実態化されていく場面が出てくる。

歴史研究の基本史料とされる文書でさえ、このような紆余曲折を経て伝来しているのである。

「武士とはなにか」という問いは、新たな枠組みにもとづく研究の出发点としたい。多様なモノ資料を配列した展示を通して、武士とサムライのあいだに横たわる問題群を視覚的に読み取っていただけたら幸いである。

中世と近世を連続した目でみると、武士という存在をめぐる連続面と断絶面の絡み合いがほぐれてくる。ここでは一見とつきにくい武士の文書について紹介しよう。

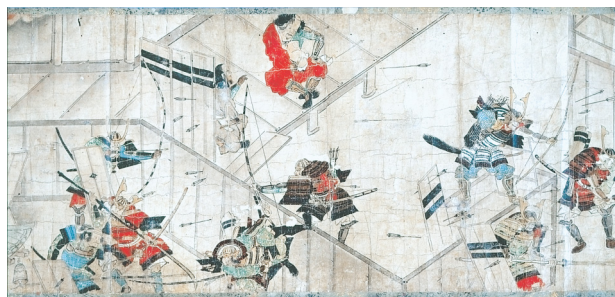
中世社会では合戦の手柄を証明するために、文書のやりとりが行われた。武士は戦功を書き連ねて申告する必要がある、大将から感状というお褒めの文書をもらう。律令制度をたてまえとする日本中世らしい現象で、当時の武士にとって文書作成が家の存続を左右する実用知だった。

高橋 一樹

人がこれほどサムライにこだわり、自己や集団を象徴的に表現する手段とするのはなぜなのか。

国内外を問わず、現代社会でサムライ・フリークの再生産にもっとも影響をもつのは、ゲームソフトとアニメらしい。

あるゲームソフトは、戦国時代を舞台に史実ど



企画展「武士とはなにか」は10月26日〜12月26日。問い合わせは☎03(5777)8600。

「結城合戦絵詞(ゆうきかつせんえことば)」。修復に伴う歴博の学際的な調査で絵巻の順序が正され、切腹している武将が足利持氏で場所は鎌倉、とする学説の正しさが確かめられた。今回の企画展示で公開